

そのような「平均的アメリカ人」の生活を実現可能なものとして希求しえた者たちとは、WASP や 欧州からの〈新移民〉達なのであり、そこに〈ゲットー〉〔マイノリティーの居住地区〕に閉じ込められたアフリカ系アメリカ人などは当てはまらず、黒人らは、階級の「社会的流動性及び消費の主要な経路から切り離なされ」、「平均的アメリカ人」の範疇に入っていなかったことがあらためて論じられているこのような〈カラーライン〉〔肌の色に基づく社会的な境界線〕の存在もまた〈革新主義〉の動向の中に指摘せねばならぬ特徴である。

3-4. 〈革新主義〉： その史的 위치づけと意義

3-4-1. 「現代アメリカ」形成における〈革新主義〉の位置づけ

以上をふまえ、最後に、本章でわれわれが明らかにすべき「現代アメリカ」の形成史における〈革新主義〉の位置づけや、その意義を示すことを試みたい。

ここまでで検討したとおり、建国から 19 世紀までのアメリカ、すなわち、「農業中心、農村中心、個人中心」の社会にして、あらゆる社会問題の解決手段となりえた西部フロンティアに「自由と民主主義」が担保された独立自営農民による〈孤立主義〉的な 19 世紀の古き良きアメリカは、当時西欧に席卷した〈帝国主義〉的政情にともなう多様な煽りをうけ、従来のおおらかにして無秩序なる社会構造では対応が困難となった。かくて、「工業中心、都市中心、組織中心」の社会にして、多様な科学的知見の応用で実現した〈大衆消費社会〉に新たなるフロンティアを見だし¹²⁰、そこで「自由と民主主義」を享受する都市の中産階級たちによる 20 世紀のアメリカへと変貌をとげたのであった。

この著しい社会変革の架け橋となり、「新しいアメリカ」への道を牽引したのが〈革新主義〉運動に他ならない。その内実は、科学的知見を有する都市の中産階級たちによる、広範で多様な領域におよぶ社会構造改革であった。〈革新主義者〉たちが改革せんとした対象とは、もはや 20 世紀的情勢に対応不

能となった「19世紀アメリカニズム」、すなわち、古き良きアメリカの非効率で無秩序なる構造の一面であった。

「革新」と「保守」の融合をみる（社会的福音主義）の下支えのもと、この運動に共感する改革者たちが、問題解決の基軸としたのが科学的知見であった。政策策定者などは、連邦政府を介入させることによって、政治・経済・社会福祉を改革を進めアメリカに新しい秩序が整えられたが¹²¹、そこでは大別して、ハーバート・クローリーのような大企業など社会的強者の権利を制限し公平な経済競争を整えるものと、ジェーン・アダムズのような（新移民）など社会的弱者の権利を拡大し社会紐帯を再構築するものという、2つのアプローチを見出すことが出来た。

産業上での革新の基盤となったのが、ザンズが「研究促進体制」と呼ぶ、連邦政府、新設された研究志向大学、大企業やその研究所、及びのちに軍も含めて構成される柔軟な人的流動性をもつ体制の構築であった。「研究促進体制」において、企業は事業拡大を技術革新にもとめた。研究志向大学との連携により、実業と科学を有機的に統合した巨大複合体が形成され、これがのちの物質文明の基盤となった。また、産業を担う人間の集団管理にも、社会科学の応用により合理性を導入し、組織化された生産工程を通して徹底管理した。その動向は1914年以降のフォード社の大衆車「モデル T」の戦略に典型的だが、（新移民）など人件費の安い非熟練労働者を大量に雇い、動きつづけるベルトコンベア上での単純作業により大量生産を実現する一方、労働者には、高賃金、自社車の価格低減、そして余暇を提供することで、生産活動の改善のみならず、消費活動を促進し、労働者は消費者としても育てられていった。新たに大規模なる国内市場が出現するのである。

市場における消費者の購買能力や動向、そして製品の販売戦略の策定にもまた、社会科学的知見が積極的に応用された。1920年代までに、いまや消費者ともなった都市部の（新移民）たちであるが、彼らはそれぞれ多様な出自と文化的感覚をもっており、その消費動向の把握が困難であった。その際、心理学者たちは、陸軍での集団式検査の経験から、統計学を駆使して人間集団に平均の概念を適用した。そこに現れたのが正規分布の中心としての「平均的アメリカ人」像であり、そこに焦点をあてた製品開発方針と市場戦略が策定された。

心理学的知見を応用した「広告」が消費者に訴求する商品は、対象購買層とする「平均的アメリカ人」像やその生活感とともに示されたのだが、当初、それらは実体のない理論的な存在でしかなかった。しかし、多様な文化をもつ（新移民）たちは、広告のなかの「平均的アメリカ人」像などに触れ、今後、自らが達成すべきアメリカ的生活様式の具体的な共通ヴィジョンを獲得する。それをうけ、彼らは、

教育を受けてホワイト・カラーとして組織に参入するとともに、〈記号的消費〉の欲求のうちに、かかるアメリカ的生活様式を、実際に、漸次実現していった。つまり、理論的な「平均的アメリカ人」像は、民族的・文化的の多様性をある程度包摂しながら、20世紀の〈大衆〉の実質的存在、すなわち実際の「アメリカ人」を生み出す大きな要因の一つとなったといえよう。ただし、それは「平均的アメリカ人」像とはあまりに遠いと WASP が考えた存在 —— 黒人、ネイティブ・アメリカン、日本人をはじめとするアジア系移民など —— を、もとより除外していた点もまた、〈革新主義〉のもう一つの大きな特徴として留意すべきである。

かつて〈労働者階級〉にあった欧州からの〈新移民〉たちの多くは、アメリカの地で〈中産階級〉への階層移動をはたした。そして、周囲と同水準の消費行動に参加することは、生活実感として〈民主主義〉を感じさせた。アメリカは「中流階級の拡大を国民的計画」とし、「消費の民主化」は、「アメリカの指導の下に、戦後世界の経済秩序のモデルとなった」¹²²。かくして、層の厚い〈中産階級〉が形成され、広告に誘導された彼らの〈記号的消費〉は、1920年代以降の〈大衆消費社会〉を生み出したのであった。そして、この20世紀のアメリカを象徴する社会の誕生において、われわれは、その誕生過程に、〈革新主義〉を特徴づける動向、つまり、多領域にわたる科学と人材の越境的な下支えを見い出すことができるだろう。

このように、19世紀的アメリカと20世紀的アメリカとの間には、著しい社会構造の変化がみられるが、かかる歴史的变化を〈革新主義〉を回避して説明するには無理が生じると考えるべきではないだろうか。アメリカ史学の主要なる3つの学説は20世紀転換期に「アメリカの一大転機」があり、そこに19世紀の古き良き「ジャクソンの自由放任の時代の終焉」と20世紀の「現代アメリカ」の萌芽をみる点では認識を共有し、学説間でその動向を主導した立場に強調の相違はあれども、この歴史的「大転機」を牽引した〈革新主義〉の歴史的存在を認知する点では共通する。また、その広範にして多様な〈革新主義〉と名辞される概念の存在は、概念の有効性を問う立場もあるが、しかし、有賀貞が指摘するとおり、それが「当事者たちが革新主義者と称した」事実由来することにおいて史学的に担保されており、また、ザンズが指摘するその特徴の一面、すなわち「研究促進体制」が、当時の先進国において類をみない存在であったとする1937年の「産業研究所長会」の調査報告からもまた、その独自性ゆえに、革新主義の概念の歴史的存在と、意義を裏付けるものとなろう。

検討の最後に、われわれがここで引用すべきものとしては、「現代アメリカ」形成における〈革新主義〉の位置づけを指摘した以下のザンズの言及が適切であろう。

アメリカの卓越した地位への上昇は科学における一連の創造的な達成と、そして同時に意図的に推進された社会の再組織の結果によるものであった¹²³。

プロテスタント信仰に基礎付けられた分野横断的な科学的知見の応用によって、「現代アメリカ」の新たな社会構造と国力とを出現させた上で、〈革新主義〉は、アメリカ史において不可欠なる位置づけを持っているのである。

3-4-2. “via media” : 「中間の道」としての〈革新主義〉

ここでの最後に、〈革新主義〉の広範にして多様な動向のなかから、本論における後の作品分析での視点設定を助けるべく、われわれがとくに着目すべき特徴を抽出することを試みたい。そのための手がかりとして、ここで、あらためて、ザンズが〈革新主義者〉を論じた部分を確認しておきたい。

「アメリカの世紀」はゆるやかに構成されたエリートたちのなかに、その記録者と行為者をもつ。それらのある者たちは公的な地位にある人々だったが、すべての人々は国内及び国外で直面する挑戦を意識し、そして進歩を信じ、現代大衆社会を民主的なものにしておく必要を意識していた。登場する人々は多様であったが、彼らは影響力あるアメリカ人の増大しつつあるグループに属し、そのグループは一八七〇年代以来、自由放任主義と社会主義の危険との間にある『中間の道』を探していた。彼らは産業化がすすむ国にとってはそのどちらも不十分であると感じていた。自由放任主義は新しい政治経済の挑戦に対応することができないと思われ、社会主義の方は、個人主義と企業家精神というアメリカの伝統からあまりにも根本的な逸脱に見えた。二〇世紀初頭に、このような考えをもった人々は自分たちを「プログレッシヴ」（日本のアメリカ史の専門家の間では当時のプログレッシヴは慣例的に「革

新派「革新主義者」と訳される)と呼んだ [上記傍点部は本論文の筆者によるもの。末部の括弧内は訳書のママ。] ¹²⁴。

この部分でザンズは〈革新主義者〉が「自由放任主義と社会主義との間にある『中間の道』をさがしていた」ことを指摘する。「中間の道」と訳出された部分で、もともとザンズが記した原語は“*via media*”であり、訳者の有賀貞らは、“*via*”のもつ「道によって」¹²⁵ [~の道を進むことで] のラテン語原義をもって訳出している。ザンズのいう、この「中間の道」への志向に着目した上で、すでに検討した〈革新主義〉の具体的動向を再考するならば、やはり、その細部においても、かかる痕跡をあらためて見いだすことができる。以下にそれを示すことにしたい。

最初に挙げるべきは〈革新主義〉の社会的公正への志向を基礎付ける〈社会的福音主義〉である。これは中野耕太郎が指摘するように、本来、「ヨーロッパの歴史的文脈においては、ラディカルな社会科学とキリスト教の融合は、なかなか考えにくいもの」¹²⁶ にもかかわらず、実際に両者は結びつき、そのような志向が「アメリカの一大転機」をもたらす精神的土壌となるほどに影響の大きな影響をあたえたものであった。そして、このような融合は、「保守」的なるキリスト教を礎石とする「巡礼父祖」と、「革新」的なる西欧近代主義を追究する「建国父祖」との結びつきにおいてアメリカ建国にも遡る希有な特徴をみた、本章冒頭に挙げた有賀夏紀の指摘を思いだすならば、前例として同様な融合をみるイギリス 19 世紀の〈キリスト教社会主義〉とは単純に同一視することが躊躇されるのであり、それが本来アメリカ独自なる文脈に基づいた信条と考えることも可能であろう。

また、ハーバート・クローリーやジェーン・アダムズによる〈革新主義〉に看取しうる 2 つの大きな典型的動向は、既に検討したとおり、それぞれ「社会的強者の権利を制限」と「社会的弱者の権利を拡大するもの」であった。この両者によって構成される〈革新主義〉全体を俯瞰するならば、それぞれの作用による中間を探る道が現れることになろう。クローリーの主張の内部に限ってみても、それが、一方で大企業の権利を制限するとともに、もう一方で、社会主義とは異なり、大企業の活動を経済発展において不可欠するものであり、それ自体が「中間の道」を探る眼差しに基礎付けられているのである。

ザンズのいう「研究促進体制」においては「中間」への志向は特に顕著であり、ここで再度確認するのは冗長であろう。いうまでもなく、それが真理の探究を理とする科学と、利潤を追求する産業との融合すべく組織された体制であったことは、既に検討したとおりである。特に「平均的アメリカ人」の概

念の導入は、いうまでもなく、逐語的に「中間」への志向を現しており、広告産業でのその応用が、〈大衆消費社会〉のみならず、移民たちの民族的・文化的の多様性を包摂した、20世紀の〈大衆〉を構成する実際の一般的「アメリカ人」を生み出す大きな要因の一つとなったのである。

そしてなにより、「研究促進体制」が「中間の道」を探る営みにおいて創出した最も象徴的なものが、文字通りの社会階層的「中間」である〈中産階級〉“the middle class”の拡大であろう。ノーベル経済学賞の榮譽を受けたポール・クルーグマンやトマ・ピケティといった俊才たちが共通して指摘するように、「中産階級は経済が成長するにつれて自然発生的に誕生するのではなく、政治によって『つくられなくてはならない』」¹²⁷ ことをここで参照するならば、20世紀の『『アメリカの世紀』の看板』¹²⁸ともなった、あの層の厚い〈中産階級〉の出現に、〈革新主義〉による明確にして大きな働きかけの契機を指摘しないわけにはいかないであろう。

「中流階級の拡大を国家的計画」としたこの20世紀のアメリカの動向は、ザンズによれば、〈革新主義者〉たちが、「巨大市場への大衆の全面的な参加を民主的な権利とみなした」¹²⁹ ことにおいてであった。さらに、アメリカ史学者の常松洋の指摘が含意するように、この〈中産階級〉の拡大、すなわち「中間の道」を探ることとは、「自由と民主主義」というアメリカが考える普遍理念の実現に関わり、かの国の根源的な志向性ゆえと考えることも可能であろう。

消費が自由や民主主義の可視的表現になり、物質的幸福の実現がアメリカ的生活方法になった〔中略〕。建国以来一貫して、無階級社会を理想としてきたアメリカでは、すべての市民が一定の経済的地位に到達し、中産階級になることが望ましかった。一九世紀末まで、それは土地所有（の可能性）によって保証されていた。フロンティアが消滅してしまうと、耐久消費財が土地にとってかわったのである¹³⁰。

もとより、最も根本的な「自由と民主主義」という理念においても、もしこれを個人主義と結果の平等とを同時に追求する理念と考えるならば、これ自体が両立しえない価値であることから、アメリカにおいて「中間の道」を探る営みはその本質に大きく関わるものと言うべきではないだろうか。

アメリカは、以降、〈大衆消費社会〉と〈中産階級〉をめぐる「自由と民主主義」の理念を、自国の

みならず、世界共通の「普遍的価値」とも拡大解釈することを通して、この理念を世界に波及することを使命と信じることとなる。ここにおいてヘンリー・ルースのいう「アメリカの世紀」が完成されるわけだが、これが「マルクス主義にたいするアメリカの代案となった」のである。

このように、ザンズが指摘するこの「中間の道」をさらに敷衍して議論するときには辿り着く帰結点が、アメリカ政治学者の古矢旬をはじめ、多くの研究者が「アメリカニズム」の名のもとに指摘する、アメリカのほぼ唯一の国民統合の契機となる「啓蒙普遍の約束」、つまり「自由と民主主義」という「普遍国家」としての性格に他ならない。

ただし、〈革新主義〉期のアメリカが求めた「中間」とは、黒人、日本人移民らのもつ特殊性を、およそ暴力的に切り捨てた上での、WASPによる都合の良い〈共同幻想〉と言うべき側面があることも常に留意する必要がある。その一方で、ザンズのいう「中間の道」を追究する営みとは、古矢のいう「アメリカニズム」に示される「普遍国家」の性格に関する局所的な言い換え、あるいは、歴史の浅い移民大国が国家的統一を得るべく「普遍」を追究する際の具体的方途の言い換えに過ぎないと考えられることに、われわれの認識は到達するのである。